

トルコの伝統刺繍について —19世紀後期～20世紀中期の庶民の衣装と装飾品—

The Techniques of Ottoman Embroidery:

Folk Costumes and Ornaments of the Late 19th to the Mid 20th

川口 素子

KAWAGUCHI, Motoko

I はじめに

かつてヨーロッパ、アジア、アフリカに及ぶ広大な領地を有したオスマン帝国、人々はイスラム文化の精神性をもとに華麗かつ緻密に衣装や装飾品に表現した。それは宮廷のみならず庶民の間においても同様であった。そうした庶民の、衣装や装飾品の刺繍を中心に、とくに、19世紀後期から20世紀中期の衣装や装飾品における「刺繍」について検討してみる。

II トルコの略史と地理

ここで簡単に歴史を振り返ってみると、中央アジアの一部族であった遊牧民・突厥（チュルク族）は、中央アジア北部を征服したあと、イラン、イラク、アルメリアと西進、その間イスラム教に改宗して、アナトリア（現在のトルコ中央部）に侵入、一部を支配下におさめた（1037年）。チュルク系の君主、オスマン族は周辺の国々を次々に侵攻、版図を拡大していった。オスマン帝国の時代は、帝国崩壊（1923年）までおよそ600年の長きにわたり、とくに16世紀から19世紀にかけてアジア、ヨーロッパ、アフリカと広大な領土の拡大とともに繁栄したのは誰もが知るところである。

1326年、ブルサを首都としたオスマン帝国は、アナトリアを中心に、領土拡大に力をいれていた。

当時、コンスタチノーブル（後のイスタンブール）はビザンチン帝国（東ローマ帝国）の首都であったが、1453年、オスマン帝国の第7代スルタン、メフメト2世によりビザンチン帝国は滅ぼされ、コンスタチノーブルはオスマン帝国の首都となった。1923年よりアンカラが首都になっている。

現在のトルコは、マルマラ海、エーゲ海、地中海、黒海の4つの海と、ギリシャ、ブルガリア、シリア、イラク、イラン、アルメリア、グルジアの7つの国に囲まれ、国土は日本の約2倍である。

トルコはイスタンブールのあるマルマラ海地方、エーゲ海地方、地中海地方や、現在の首都アンカラがある中央アナトリア地方、そして東及び東南アナトリア地方、黒海地方の7つの地方があり、47の県に分けられている（図1）。



図 1 トルコの地図

- A—中央アナトリア地方・アンカラ県
- B—マルマラ海地方・ブルサ県
- C—マルマラ海地方・ブルサ県・ケレス地域
- D—エーゲ海地方・キタフィヤ県
- E—マルマラ海地方・バシケシル県

III 刺繍の流れ

3大陸を征服した（1517年）オスマントルコは、イスラムの精神をもとにヨーロッパを含めた周辺の国々からの影響を得て多彩な装飾を生みだした。

装飾の特徴は、絹糸をはじめ金銀糸、金属扁平糸など変化にとんだ素材に加え、トルコ独自の技法にあ

る。

トルコの刺繍技法は、例えばサテン・ステッチをサルマ、コード刺繍をコルドン・トゥトマというように、馴染みの技法もあるが、ムルバーやムシャバクのようにトルコ特有の技法が多いために、技法名はトルコ語で示し、その方法に説明を入れた。

各技法は「Ⅶ刺繍技法」にまとめ、文中にある技法は、例えばアンテップ・イシは、Ⅶ刺繍技法の①であるから、「技法①」とした。

刺繍の流れを見ると、オスマントルコ時代の16世紀は、幾何学模様をシンメトリーにあつかい、絹の刺繍糸と金、銀色の扁平の金属糸の使用がみられる。刺繍糸は赤、青、黄、茶、黒色が見られるが、色調は乏しい。技法は布目を数えて刺すカウンテッド・ステッチ^{註1)}である。

17世紀は小さい文様を組み合わせた、シンメトリーのボーダー柄が多い。金、銀糸も加わり、また色調も増えてトマトの赤、サンゴのピンク、ルビーの赤、カフェオレの茶色が好まれた。

ランニング・ステッチで面を埋めたペセント・イシ（技法⑬）のほか、マラシュ・イシ（技法⑩^{註2)}、やコルドン・トゥトルマ（技法⑥）を中心に、アププリケ、テル・クルマ（技法⑰）などの技法も見られる。

18世紀になると、化学染料の登場やヨーロッパの刺繍技法も加わり、さまざまな装飾を生み出された。しかしこうした傾向は、ヨーロッパ化していくことを意味する。

一方、トルコ独自の技法である、陰影をつけたペサント・イシレメ（技法⑬）や、鉤針を用いたチェーンステッチ、スザニ（技法⑳）も、このころに多く見られる技法である。

19世紀は、ヨーロッパから入ってきた木綿刺繍糸の使用で、色数の増加、ビーズや貴石など異なった素材の出現や、刺繍ミシンも開発されている。しかしヨーロッパ化されるなか、文様もイスラム精神の抽象的なものから、具象的なものに移行していく。

19世紀後半から20世紀になると特に伝統技法は、伝統技法は徐々に衰退の道を歩むようになる。

トルコの刺繍は、衣装やそれに伴う装飾品（腰帯や腰飾り布、スカーフ）のほか、イスラムの儀式にかかわる装飾品（婚礼用タオル、割礼式の祝い布、コーランや鏡のカバーなど）や、生活用品（ナプキン、壁掛け、風呂敷、ハمام用サンダル）など、あらゆるものに施された。

Ⅳ 衣装について

1 衣装の構成

地域により幾つかのパターンがあるが、特徴的な衣装を構成別にみると、次のようである。

①たつぷりとゆとりのあるパンツ、シャルヴァル（Şalvar）に、シミーズ、ギョムレク（Gömlek）を着け、その上にワンピース、アンタリ（Entari 図2）もしくは長着、ウチェテキ（Üçetek 図3）を着ける。

②パンツ、シャルヴァルにシミーズ、ギョムレクの上に長着、ウチェテキ（Üçetek）、その上にジャケット、ジェプケン、（Cepken）を重ねる。

③パンツ、シャルヴァルにシミーズ、ギョムレクを着け、ジャケット、ジェプケン（図12、図15）を着ける。

④パンツ、シャルヴァルにシミーズ、ギョムレクを着け、中着、イエレキ（Yelek）またはサルカ（Sarka）を重ね、ジャケット（Ceket 図5）をはおる。

以上の衣装をつけ、頭にはスカーフ、チェヴレ（Çevre）やオヤ（Oya）、帽子、フェス（Fes）などをつける。

なお、以上の名称は、用いる素材や形、地域によっても異なる。

各地域の衣装は、ベルベットをはじめ、サテン地、木綿地に、金、銀糸や絹糸、毛糸などで装飾した。

衣装の刺繍材料で金、銀糸が多く登場するので、次に説明する。

金、銀糸の種類はつぎのようである。形状は「図18 金、銀糸の種類」を参照してほしい。

・カラプタン（Klaptan）

私たちの知る金、銀糸のことで、絹糸を芯に細い金銀プレートを巻きつけたもの。

・シム（Sim）

細い糸もしくは細い糸を2本縊り合わせたもの。

・スルマ（Sirma）

細い糸を8～10本縊り合わせもの。また金、銀糸のこともいう。

・テル・クルマ（Telkirma）

金、銀の金属扁平糸。またそれを用いた技法のことという。専用の扁平針がある。

・ティルチル（Tirtil）

細い金、銀糸をコイル状にしたもの。5～10mmほどに切り、そのコイルを、木綿糸を通して止める。

なお、ここでの金糸、金プレートの素材は、真鍮や

合金を含み、銀糸、銀プレートは、銀または合金が含まれる。なお文中の金糸の太さや、止め糸(太さ)は、日本の表示である。

特徴のある衣装5点を見してみる。いずれも成人の女性のものである。

2 各地域の衣装 (図1)

Aー中央アナトリア地方・アンカラ県

Bーマルマラ海地方・ブルサ県

Cーマルマラ海地方・ブルサ県・ケレス地域

Dーエーゲ海地方・キタフィヤ県

Eーマルマラ海地方・バシケシル県

Aーアナトリア地方・アンカラ県 (図2)

「アンカラ大学、衣装博物館所蔵品より」

年代ー19世紀中期

婚礼や祭礼に用いられるワンピース、アンタリ(Entari)である。特に赤地または赤紫色のベルベット地に、金、銀糸で刺繍したものをビンダール(Bindallı)といい、マラシュ・イシ(Maraş işi^{註2)})したものである。つる草と花柄を施したトルコの代表的な衣装である。

《ワンピース、ビンダール(Bindallı)》

服地ーベルベット地

刺繍材料ースルマ、厚紙(台紙)、カタン糸30番(止め糸)

刺繍技法ーマラッシュ・イシ(技法⑩^{註2)})

Bーマルマラ海地方・ブルサ県 (図3、図4)

年代ー19世紀中期

婚礼、祭礼などに用いられる衣装で、ワンピース形のシャツ、ギョムレク(Gömlek)にゆとりのあるパンツ、シャルヴァル(Şalvar)をつけ、脇をスリットした長着、ウチェテキを着る。そしてバックル付ベルト、ケメル・トカス(Kemer tokası)を着ける。

スリットを入れた長着の裾を腰ひもに挟むことで、床に座る生活や作業の利便性がある。長着はつる草と花柄を刺繍してある。

《長着ウチェテキ(Üçetek)》

*ウチェとは3、テキとは腰から下、つまり腰から下が3つに分かれた衣装のこと。

服地ーサテン地

刺繍材料ースルマ、厚紙(台紙)、止め糸(カタン糸30番)

刺繍技法ーマラッシュ・イシ(図4(技法⑩^{註2)})

Cーマルマラ海地方・ブルサ県ケレス地域(図5、図

6、図7、図8、図9、図10、図11)

年代ー20世紀前期

婚礼、祭礼などに用いられた衣装で、刺繍を施したパンツ、シャルヴァル及びシミーズ、ギョムレクを着け、その上に脇をスリットした長着、ウチェテキ、さらに中着、イエレキ(Yelek)を2枚重ね、幅広の帯を締める。そして上着、ジャケット(Ceket)を羽織る。最後に絞りのエプロン、オンルク(Onluk)をつける。《長着、ウチェテキ(Üçetek)及び中着、イエレキ(Yelek)》(図5、図6、図7)

服地ーブロード地

刺繍材料ー蛇腹ブレード、化繊毛糸、スパンコール、ビーズ

刺繍技法ージンジル・イーネ(技法⑳)、シラ(技法⑮)、チェプラズ・イーネ(技法⑤)

《シミーズ、ギョムレク(Gömlek)及びパンツシャルヴァル(Şalvar)》(図8、図9、図10、図11)

服地ー手織り木綿地(cm/経11、緯14、厚さ0.8)

刺繍材料ー中細毛糸

刺繍技法ーシラ(技法⑮^{註2)})

Dーエーゲ海地方・キタフィヤ県(図12、図13、図14)

年代ー20世紀中期

婚礼、祭礼などに用いられる衣装で、シャツの上に、ゆとりのあるパンツ、シャルヴァルと、生命の木の花柄をマラシュ・イシ(色布入れ)を施したジャケット、ジェプケンの衣装である。

《ジャケット、ジェプケン(Cepken)》

服地ーベルベット地

刺繍材料ースルマ、厚紙(台紙)、カタン糸30番(止め糸)、ティルチル、木綿地(色布布)、スパンゲル及びビーズ

刺繍技法ーマラッシュ・イシ(図14(技法⑩^{註2)})

Eーマルマラ海地方・バシケシル県(図15、図16、図17)

年代ー20世紀前期

婚礼、祭礼などに用いられる衣装で、シャツ、ギョムレクの上に、ゆとりのあるパンツ、シャルヴァルをつけ、コード刺繍を施したジャケット、ジェプケンをつける。コードは金銀糸を2本縫り合わせたものや、三つ編みしたものをを用いて花や葉を流線で表している。

《上着ジェプケン(Cepken)》

服地ーベルベット地

刺繍材料ーコルドン、止め糸(カタン糸30番)

刺繍技法ーコルドン・トゥトルマ(図17技法⑦)



図2 A アナトリア地方・アンカラ県



図3 B マルマラ海地方・ブルサ県



図4 マラッシュ・イシ



図5 C マルマラ海地方・ブルサ県・ケレス地域



図6 同 地域（後側）中央

図7 長着及び中着の刺繍 右



図8 同 地域 シミーズ 右下



図9 同 地域 パンツ



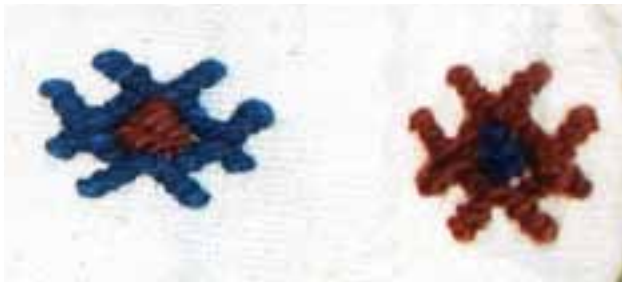


図10 シミーズ、ダーニング・ステッチ

図11 パンツ、ダーニング・ステッチ 右



図12 D エーゲ海地方・キタフィヤ県



図13 同 県（後側）

図14 色布入れ
マラシュ・イシ



図15 E マルマラ海地方・バシケシル県 左

図16 同 県 （後側）中央

図17 コルドン・トゥトマ 右

V 衣装の装飾品

ウエストの装飾には、金属ベルト(図3)や1 腰帯、腰飾り布がある。そして頭には2 スカーフを着ける。

1 腰帯と腰飾り布(図19～図30)

A-腰帯「クシャクとウチェクル」、B-腰飾り布「ヤールク」について、筆者所蔵品の中から特徴的な作品12点を取り上げ、刺繍技法を見てみる。

刺繍素材の金糸は「図18」を、刺繍技法は、「Ⅶ刺繍技法」を参照のこと。

腰帯には、「ウチェクル」(短いという意味)と、「クシャク」(長いという意味)がある。

またクシャクは男性、ウチェクルは女性のものとする説もあるが、女性でも2回巻きするものもある。さらに長さもまちまちで、いずれのものかの判断は難しい。そうした理由から、クシャクとウチェクルをまとめて説明する。

1-A 腰帯「クシャク(Kuşak)とウチェクル(Uçkur)」(図19～図23)

腰帯「クシャク」と「ウチェクル」は、後ろから前にまわし、中央もしくは側面でしめる(図15)。ベルトの機能と装飾の役割をもつ。これらは1回巻きするものが多いが、2回巻きするものもある。刺繍は帯の両端に施される。

所蔵品31点から見る寸法は、幅22cm～35cm、長さ176～220cm位である。

図19「イチジク」

年代-20世紀中期

布地素材-麻平織り地

刺繍素材-絹糸、シム

刺繍技法-ムルバー(技法⑫)

寸法/cm 23×196

図20「アザミ」

年代-19世紀後期

布地素材-モスリン地

刺繍素材-絹糸、シム

刺繍技法-ペサント(技法⑬)

寸法/cm 33×202

図21「アネモネ」

年代-20世紀前期

布地素材-木綿楊柳地



図18 金糸の種類

刺繍素材-絹糸、シム、スパンコール

刺繍技法-ムシャバク(技法⑪)

寸法/cm 23×200

図22「ボトル」

年代-20世紀中期

布地素材-木綿楊柳地

刺繍素材-絹糸、シム

刺繍技法-ムルバー(技法⑫)

寸法/cm 23×182

1-A「クシャク、ウチェクル」



図21「アネモネ」



図19「イチジク」左上

図20「アザミとつる草」
左中

図22「ボトル」左下

図23「ランプ」右



図23「ランブ」

年代－19世紀後期

布地素材－木綿楊柳地

刺繍素材－絹糸、シム

刺繍技法－ムルバー（技法⑫）

寸法／cm 16×180

1－B 腰飾り布 [ヤールク (Yağlık)] (図24～図30)

「ヤールク」はクシャクやウチェクルと比較すると、幅が広く、丈は短いタオル形をしている。

装飾方法は2つあり、1つは丈を二つ折りし、図柄をずらしてエプロンのように飾るもの、もう1つは、幅の両端にタックをとり、後ろから前にまわし、前面で合わせて垂らす（図12）。いずれもその上からベルトを締める。

刺繍は布地の両端に施され、所蔵品からみた寸法は、幅45cm～56cm、長さ120cm～155cm位である。

図24「つる草」

年代－20世紀前期

布地素材－木綿地に絹糸織り込み地

刺繍素材－テル・クルマ、シム

刺繍技法－サルマ（技法⑭）、ペサント（技法⑬）

寸法／cm 45×142

図25「アザミ」

年代－20世紀前期

布地素材－絹モスリン地

刺繍素材－絹糸、テル・クルマ、シム

刺繍技法－ペサント（技法⑬）

寸法／cm 45×142

図26「アザミ」

年代－19世紀中期

布地素材－綿モスリン地

刺繍素材－スルマ

刺繍技法－サルマ（技法⑭）、アンテップ（技法①）

寸法／cm 45×142

図27「アネモネ、チューリップ、ヒヤシンス」

年代－20世紀中期

布地素材－麻平織り地

刺繍素材－絹糸、テル・クルマ

刺繍技法－ムシャバク（技法⑪）、サルマ（技法⑭）、バルック（技法④）

寸法／cm 49×130

図28「チューリップ」

年代－20世紀前期

布地素材－木綿と麻の混紡地

刺繍素材－絹糸、銀扁平糸

刺繍技法－ムルバー（技法⑫）

寸法／cm 48×152

図29「ヒヤシンス、バラ、チューリップ」

年代－20世紀前期

布地素材－モスリン地

刺繍素材－絹糸、テル・クルマ

刺繍技法－シラ（技法⑮）、サルマ（技法⑭）

寸法／cm 56×155

図30「生命の木、船に人、蜚」

年代－20世紀前期

布地素材－麻地

刺繍素材－絹糸、テル・クルマ

刺繍技法－ペサント（技法⑬）、ムシャバク（技法⑪）、サルマ（技法⑭）

寸法／cm 48×120

2 スカーフ [チェヴレ (Çevre)] (図31～図36)

儀式用のスカーフで、特に婚礼の花嫁の頭を覆う布を、ゲリン・バシュ・ウルトゥ (Gelin baş Örtü)、またドゥバク (Duvak) ともいう。

例えば魔除けの意味をもつ赤色（図31）や、イスラムの象徴の月と星（図32）、つる草や花（図33）などの吉祥紋を用いる。例えばブルサ県のものに、生命の木、モスク、花々などの刺繍（図34）が見られる。

同じブルサ県でも、ケレス地域は周囲にビーズを付けたスカーフ、チェヴレで頭を覆い、その上に多色ビーズで埋めた帽子を被る。さらに花柄の刺繍のスカーフをつける（図35、図36）ものである。

このなかで図33や図34は、貴重品など包む風呂敷、ボフチャ (Bohça) としても用いる。

1-B「ヤールク」



図24「つる草」上



図25「アネモネ」右上

図27「生命の木、アネモネ、チューリップ、ヒヤシンス」
下



図26「アザミ」上

図28「チューリップ」左下

図29「ヒヤシンス、バラ、アザミ」下





図30 「生命の木と船」

2 スカーフ [チェヴレ]



図31 「赤地にプル」 上

図32 「月と星」 左

図33 「チューリップにつる草」 左下

図34 「モスク・生命の木・花」 下



図31 「赤色にプル」

年代—20世紀前期～中期

布地素材—シルクオーガンジィ地

刺繍素材—プル (Pul スパンコール)、木綿糸

刺繍技法—返し縫い

寸法／cm 90×90



図32「月と星」

年代－19世紀後期～20世紀前期

布地素材－ガーゼ地

刺繍素材－テル・クルマ

刺繍技法－テル・クルマ（技法⑮）

寸法／cm 90×90

図33「チューリップにつる草」

年代－20世紀前期

布地素材－綿モスリン地

刺繍素材－シム、テル・クルマ

刺繍技法－ペサント（技法⑬）、サルマ（技法⑭）

寸法／cm 76×77

図34「モスク、生命の木、花」

年代－19世紀前期

布地素材－綿モスリン地

刺繍素材－絹刺繍糸、テル・クルマ

刺繍技法－ペサント（技法⑬）、ムシャバク（技法⑪）、サルマ（技法⑭）

寸法／cm 90×90

図35「バラ」、図36（部分）

年代－20世紀中期

布地素材－ガーゼ地刺繍素材－羊毛糸、ビーズ

刺繍技法－カナビチェ（技法⑨）



図35「バラ」左

図36 同 刺繍 上

寸法／cm 77×154

トルコの伝統刺繍は、衣装や装飾品のみならず、儀式や生活用品にいたるものまで施された。

つぎに1 婚礼用タオル、2 マム用サンダル、3 割礼の祝い布、4 壁飾り布を見てみる。

Ⅵ 儀式及び生活用品の装飾

1 婚礼用タオル、ハヴル (Havlu) (図37)

年代－19世紀後期～20世紀前

女性から男性に婚礼用に贈られるもので、男性が婚礼前夜に髭をあたる儀式に用いた。これは儀式用に作られるもので日常用ではない。儀式後室内に飾られる。

バスタオルほどの大きさで、中央部はタオル（パイル）地に織られ、両端の平織したところに刺繍されている。絹糸や金糸を用いて、生命の木（糸杉）やアネモネなどの吉祥の文様が施されている。

布地素材－木綿タオル地（両端平織地）

刺繍素材－絹刺繍糸、テル・クルマ

刺繍技法－ペサント・イシレメ（技法⑬）、テル・クルマ（技法⑰）、サルマ（技法⑭）

寸法／cm 90×90＊（装飾用にタオル部分切り取り）

＊通常の長さは120cm以上

2 ハマム用サンダル [タクンヤ (Takunya)] (図38)

年代－20世紀前期

木部に鳥文様の螺鈿細工を施し、先端は刻みをつけた瓢箪型の女性用サンダルである。鼻緒（ベルト）に



図37 儀式用タオル 左上
 図38 ハマム用下駄 右上
 図39 割礼、祝い布 左下
 図40 壁飾り 右下

チューリップ文様をマラッシュ・イシを施してある。

ハマム（公衆浴場）は女性が堂々と外出できる数少ない社交の場であり、オシャレをする場であった。

ベルト・布地—ベルベット地、厚紙（芯）

布地素材—ベルベット地

刺繍材料—スルマ、ティルチル、木綿刺繍糸、スパングル

刺繍技法—マラッシュ・イシ（技法⑩）

寸法／cm 26×6.5幅（広い部分）変形瓢箪型

3 割礼用祝い布［ペシケシュ（Peşkeş）］（図39）

年代—20世紀中期～後期

割礼式は、イスラム教徒の男児が行う行事である。家族はもとより親戚、友人たちも加わって祝う。ご祝儀にこの祝い布を添える。祝い布はいろいろな形にと

とのえ、儀式を終えた男児のベッドに飾られる。文様や素材、装飾技法は様々である。

布地素材—木綿地

刺繍材料—木綿刺繍糸、シム、テル・クルマ

刺繍技法—テル・クルマ（技法⑰）

寸法／cm 64×65

4 壁飾り［シュス（Süs）］（図40）

年代—20世紀前期

壁飾りの1つで、イスラム語で「マッシュラー（素晴らしい）」と大きく書かれ、その下に「1月1293年、コンヤ、スツウカ作」とイスラム暦で書かれている。

家の中に飾り魔除けにする。

布地素材—サテン地

刺繍材料—絹刺繍糸

刺繍技法—アトマ（技法③）

寸法／cm 74×54

Ⅶ 刺繍技法

解り難いものだけに、図41技法1及び図42技法2に記した。なお図41技法1（サンプル）は実物の約120%である。

刺繍素材－麻地

刺繍材料－絹糸

①アンテップ・イシ（Antep işi）（図14、図41）

ドロンワークの一種で、刺繍した図柄の周囲を、ヘムステッチでかがる方法。

②アテキ（Atki）（図42）

一定の間隔で縦、横、斜めに糸またはプレート置き交差したところを、別糸でクロスステッチして止める方法。

③アトマ（Atma）

ブハラ・イーネ（Buhara işne）ともいう。広い面を埋める方法。1本の糸を渡し、間を止めながら戻る。次に最初に渡した糸と平行に糸を渡し止めながら戻る。以上を繰り返し、面を埋める方法である。コーチング・ステッチのことという。

④バルック・シリ（Balık sirti）（図41）

中心が重ならないフィッシュボーン・ステッチ。

⑤チャプラズ・イーネ（Çapraz işne）

ヘリンボーンステッチのこと。

⑥チェクメ・アジュール（Çekme Ajur）（図41）

ドロンワークの一種で、縦糸（又は横糸）を抜き、残った横糸（又は縦糸）をすくってウイービングしたもの。

⑦コルドン・トゥトルマ（Cordon tutturma）（図42）

コードステッチのことで、コードをコーチングステッチで止める方法。

⑧ゴゼメ（Gozeme）

アウトラインステッチを用いて区分けすること。また隣り合わせた色を変える、また技法を変える方法で区分けする方法のこと。

⑨カナビチェ（Kanaviçe）

クロスステッチのこと。

⑩マラシュ・イシ（Maraş işi）（図42）

ディヴァル（Dival）刺繍ともいう。マラシュとはアナトリア地方にある地名で、当初ここで制作された。図柄（厚紙など）を貼り付け、それを芯に金銀糸でサーフェス・ステッチしたもの。

⑪ムシャバク（Mushabak）（図41、図42）

布目を決められた順序で規則的に（横、斜め）すくい、斜めの移動を繰り返す。横、斜線の模様ができる。表裏同じ模様になる。

⑫ムルバー（Mürver）（図41、図42）

布目を決められた順序で（縦、横）すくいながら斜め移動する。横、縦線の模様ができる。表裏同じ模様になる。

⑬ペサント（Pesent）（図41）

トルコ刺繍の中でも最も古くから用いられた技法で、ランニング・ステッチで図柄を埋める方法である。これを濃淡をつけて刺す（ロングアンドショウトステッチのように）ものは、「ペサント・イシレメ」という。花びらなどのぼかしに多く用いられる。

またランニング・ステッチもしくはダーニング・ステッチのことという。

表側

裏側



図41 技法1（サンプル）

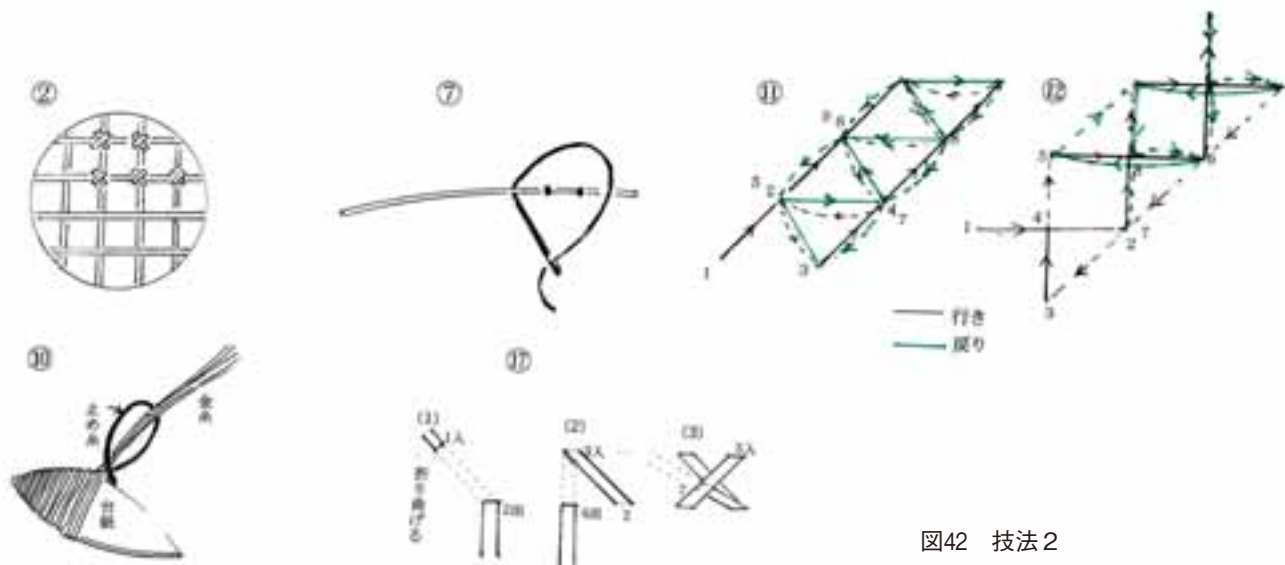


図42 技法2

⑭サルマ (Sarma) (図41)

トルコ技法の1つでサテン・ステッチのこと。

⑮シラ (Sira)

ランニング・ステッチのこと。

⑯シルマ (Sirma)

金銀糸・シム (Sim) を入れた刺繍のこと。

⑰テル・クルマ (Tel kirma) (図42)

扁平金属糸のこと。また折って曲げるという意味で、技法名でもある。またバルトン・イシ (Bartın isı) ともいう。バルトンとは黒海地方の地名である。

⑱テル・シルマ (Tel sirma)

金属糸で面を埋めること。または巻き縫いで細いコード状に刺す方法。

⑲ゼルドズ (Zerduz) (図24)

金銀糸・シム (Sim) でコーチング刺繍したもの。

⑳ジンジル・イーネ (Zincir iğne)

チェーン・ステッチ、あるいは鉤針を用いたチェーン・ステッチのこと。なお、鉤針を用いたチェーン・ステッチをスザニ (Suzani) ともいう。

VIII まとめ

衣装について

衣装に最も多く用いられる技法は、金、銀糸を用いたマラッシュ・イシ (Maraş ışı) と、コルドン・トゥトルマ (Cordon tutturma) である。

マラッシュ・イシは、ディヴァル・イシ (Dival ışı) ともいう。ベルベット地に金・銀刺繍をしたワンピースは、ピンダルル (Bindallı) といい、トルコの代表

的な衣装でもある。プルサをはじめ、アンカラなど都市部に多く見られる。

次に多いのがコルドン・トゥトルマで、太めの糸を用いて花や葉、ペイズリー、つる草などの文様を流線的な文様に描くものである。パシケシルやイズミールなどの地中海地方のほか、マルマラ海東部、アナトリア地方にも見られる。

その他には、厚地の白色木綿地に布目を拾ったダーニング・ステッチやクロス・ステッチがあり、マルマラ海及びエーゲ海地方に見られる。

文様について

文様はイスラム教の偶像礼拝禁止の教えから、花やつる草、糸杉 (生命の木) など自然界のものを抽象化したものが多い。

花は自国の、つまり日常目にするものが題材になる。

植物で多く用いる文様は、チューリップ (図27、図28、図33) やアネモネ、バラ、アザミ (図20、図26、図29)、ヒヤシンス (図27、図29) などの草花やつる草 (図20、図24)、のほか生命の木 (図27、図30、図39) である。

文様はすぐにそれと分かるもの (図28チューリップや図37、図34の糸杉)、それに対して図27の糸杉 (オレンジ色) はすぐにはそれと解らないほど抽象化されている。これは図37のような糸杉が少しずつ変化をしたものと考えられている。

文様が似ていて判断できないものもある。「バラ」か「アネモネ」 (図21、図25、図26) か、こうした場合周囲の葉で判断することが多いが、必ずしも花と葉は同一するとは限らない。つまり文様を断定できない

ものも多い。

文様に意味を持つものに、例えば婚礼用タオル「図30生命の木と舟」は、中心に生命の木を配し、人を乗せた舟は人生の門出、両側には成長を意味する若木もしくははつる草、蛭は闇夜を照らすなど吉祥紋が多く施されている。

生き生きとのびる枝や根（図33、図34）も、生命力を表わしている。

ザクロやイチジクの実（図19）も種（粒）の多さで、多産の象徴である。また、イチジクやザクロの赤は呪術的な意味を持つものといわれる。

生き物を題材にすることは少ないが、魚、鳥、鹿などがある。魚は海に近い地域で見られ、卵を沢山産むことから多産の象徴（図12のパンツの織柄）である。

鳥は（図38下駄の螺鈿細工）嘴がイスラムの月に似ていることから用いられる。クジャクは古代的呪術シンボルで使われ、鹿は角が伸びることから生命の力を表す。

また生活習慣から生まれたものに、ボトル柄（図22）がある。娘がボトル柄の腰帯を着けると、結婚願望を周囲に伝える意味である。

イスラムの精神性

トルコの刺繍は、緻密で繊細、かつ完璧な作品である。しかし注意深く見ると、例えば花びらの枚数や形、色をごく僅か、わざと変えてある。

これは「完全をなせるのは神（ムハンマド）のみ。私たち人間には成し得ない」との考えからである。

おわりに

20年くらい前であろうか、トルコ・イスタンブルのアンティークショップで目にしたのが 長い手ぬぐい状の刺繍布であった。それは白地木綿地で1目が2mm足らずの布目を拾って刺した緻密かつ繊細、そして美しい色合い。さらに驚いたのが裏表のない刺繍（正確には表裏はある。図41）で、初めて見る技法であった。それが婚礼用の腰布とは後でわかったことだ。

現地を訪れるたびに布を探し、古本屋で本を探しトルコ語で調べた。衣装は素材やほんの少しの形のの違いで異なる。刺繍技法の複雑さに加え、トルコ語の変化はさらに困難なものにした。

今回は今回取り上げられなかった地域、例えばアジアから直接移民してきた人たちの集落、他国と隣接している地域、そうしたところのものをまとめてみたい。

研究をまとめるにあたり、アンタルヤ Azize Kahraman 専門学校の Bucan 先生、アンカラ Gaze 大学の

Bilge 先生、イスタンブルの Beyoglu 専門学校の Ayten 先生、また資料の収集のお手伝い及び通訳をお願いしたアンタルヤ在住の野中幾美さん、皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

註

註1 カウンテッド・スレッドステッチ (Counted thread stitch)

布目を数えて刺す技法（区限刺繍）のこと。

川口素子「ルーマニアの民族衣装における区限刺繍について」（「杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要」6号、2007、p42～43）

註2 マラシュ・イシ (Maraş işi) 川口素子「トルコの Maraş 刺繍とその応用技法」（「杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要」1号、2002、p39～47）

註3 スカーフ、オヤ (Oya)

ふち飾りを施したスカーフ (Oya) のことで、縫い針で作るイーネ・オヤ (İgne oya)、鉤針編みトゥ・オヤ (Tig oya)、ビーズを使ったボンジュク・オヤ (Boncuk oya) などがある。

参考文献

- Özcan. T. *Historical Costumes of Turkish Women*. Istanbul: Middle East Corp (1986)
- Attila.E, *Anadolu Giysi Kültürü*. Ankara:Dumat Offset (1998)
- Nuriye. G. S. *Turkish Embroidery*. Istanbul: Ramazanoğlu Publications (1987)
- Şehdabe. M. *Dival İşleme*. Ankara: İşlemelere İlişkin Genel Bilgilei (1996)
- Perihan. E. y. *Giyim Süsleme Teknikleri*. Istanbul: Milli Eğitim Basımevi (1984)
- Suheyra y. *Nakiş*. Istanbul:Milli Eğitim Basımevi (1997)
- Arik R. *Bölgesel Türk Giysileri*. Istanbul Milli Eğitim Basımevi (1972)
- 吉田光邦著「The Old Textiles Turkey トルコ古代染織」英国ビクトリア&アルバート博物館蔵 光琳社 (1966)

参考博物館

Antalya 「Antalya Musum」
Istanbul 「Topkapi Saray」

Istanbul 「Military Musum」

Istanbul 「Sadbek Hanim Muzesi」

参考衣裳及び装飾品

Aーアナトリア地方・アンカラ県（図2）

アンカラ大学、衣装博物館所蔵品

Bーマルマラ海地方・ブルサ県（図3）

Cーマルマラ海地方・ブルサ県・ケレス地区（図5、
図6）

Dーエーゲ海地方・キタフィヤ県（図12、図13）

Eーマルマラ海地方・バシケシル

A はアンカラ大学博物館の許可を得て、それ以外の B、C、D、E の衣裳及び腰帯、スカーフ、エプロン、儀式用タオル、ハمام用サンダルは筆者所蔵品を筆者が撮影した。